

しまね学校図書館活用コンクール 取組の概要

学校名 邑南町立石見中学校

1 応募部門 ※ 応募する部門に○を付けてください。

() 読書活動部門

(○) 学校図書館を活用した授業部門

2 実践のねらい

学習に活用される、学習情報センターとして図書館づくりと図書館活用教育を日常化していくための職員の意識改革（授業のイメージづくり）を図ることによって、

- ・ 図書館活用教育を系統的に行い、生徒の情報活用能力を育てる。
- ・ 生徒の主体的な学びや感性の育成を支える。
- ・ 教科間の連携を深め、生徒が学びやすい環境を生み出す。
- ・ 保護者や地域へ図書館活用教育を発信し、理解と協力を図る。

3 実践の概要（学校図書館とのかかわりがわかるように記すこと。）

1 授業実践に向けて

- 学習に活用される、学習情報センターとして図書館整備
 - ・ 「図書館・情報活用教育年間計画」・「情報・メディアを活用する学びの指導体系表」の作成
 - ・ 学習資料の整備と学習後の資料整理と保管（学習記録・作品・資料リスト・パスファインダー 等）
 - ・ 校内職員間をはじめ、他校や公立図書館等との情報交換
- 図書館活用教育を日常化していくための職員の授業のイメージづくり
 - ・ 校内職員研修によるスキル学習の実践の蓄積
 - ・ 図書館活用教育の積極的な公開授業や情報提供

2 学校図書館を活用した主な授業実践例

（1）「絵本は小さな美術館」（1年生美術）

1年生の1学期は、特に「図書館に親しむ」ことも大切だと考え、学習計画を立てた。本単元は調べ学習以外にも、様々な図書館活用学習があるというイメージを持つきっかけの1つともなった。美術の授業担当教員は週1日だけの非常勤なので、早めの打ち合わせが必要だ。昨年と同単元の実践記録を整理保管しておいたので、それを参考に今年度はさらに生徒同士の作品評価の時間も加えるなど、ステップアップした授業が短時間で計画できた。授業では、本校が所蔵する世界の絵本（原語書）約75冊に公立図書館から借用した絵本を合わせ、約90冊の本から絵の表現に着目しながら自分の描きたい絵本を選び、模写した。作品へのミニメッセージカード（グループメンバーから）も貼ったスケッチブックを「図書館フェア」に合わせ展示し、「小さな絵本美術館」を図書館前廊下に開館した。また、図書館日より（保護者用）で事前にそのことを紹介し、「家族の図書館フェア（11/3）」では家族の方にも見ていただき、大変好評だった。

（2）「故事成語」（1年生国語）

「ふるさと探検」（総合的な学習）や「世界遺産リーフレットづくり」（社会科）で図書館を活用した探求型学習をしてきた1年生だが、さらにプレゼンテーション型の発表のスキルを身につけるための初歩の取組として、この授業の指導計画を立てた。

故事成語を現代の暮らしに置き換えた「四コママンガ」にしてみることで、故事成語の意味の理解や古典に親しむことができた。また、グループ代表作品を6カットに分け、6人が一人一役で資料提示装

置を使って発表するという形式を取り入れ、今後のプレゼンテーション型の発表学習へのつながりを持たせた。

この授業は、校内職員と町内小中学校図書館司書に公開した。授業後、小学校4年生国語の教科書に載っている「故事成語」と中学校での学習関連や、「四コママンガ」から、「四場面のプレゼンテーション」発表への発展の仕方などを協議し、小中連携による系統的な学習の具体的な検討の場となった。

（3）「修学旅行・人権学習」（2年生総合的な学習）

2年生は前年度「しまね新聞づくり」などの学習で、情報カードの書き方など調べ学習のスキルは系統的に学んできている。その中で、「情報をまとめながら、自分の考えを持つ」ということが課題の1つであった。この授業では、事前に各班のテーマに基づいて調べ、ウェビングなどで見学の課題を焦点化し、それを修学旅行の見学で調べ、まとめていくという流れとした。最終的に「自分たちが伝えたいこと」を明確にし、それをみんなにわかりやすく伝えていくためにはどのようにしていくか、表現もいろいろ工夫していた。また、「家族の図書館フェア」(11/3)や「校内人権シーズン」(12月)でまとめたものを展示した。

（4）「おくのほそ道」（3年生国語）

生徒が主体的に取り組み、「複数の資料を読み比べることをとおして内容を理解し、松尾芭蕉のものの見方や考え方をとらえる」ためには、まず資料の選択・精選が課題であった。前年度の実践をもとに、生徒に3～4冊種類は必ず資料があるように準備した。芭蕉が立ち寄った場所の中から8ヶ所を示し、自分の調べたい場所を決め、はじめは個人の作業、次にグループでまとめていった。他のグループの発表を聞く中で、共通する芭蕉の思いも感じる事ができた。

また昨年度から教科担当者たちの声により、この時期を「日本の伝統文化シーズン」と位置づけた。「おくのほそ道」に関連する歌舞伎「勧進帳」(3年生音楽)の学習を図書館でしたり、「浮世絵とジャポニスム」(2年生美術)の学習で図書館や教室前に特集コーナーを作ったり、1年生は邦楽教室で琴や尺八にふれたり、教科間のつながりをもって全校で「日本の伝統文化シーズン」に取り組んだ。

4 実践の成果

・図書館で様々な資料にあたり、学習していくことに生徒が慣れてきた。複数の職員(教員・学校図書館司書教諭・学校司書)で学習計画を協議し、的確な資料を準備し、実際の授業も複数であるため、より綿密な授業が行いやすく、個々の生徒にも目が届きやすい。そのためか、授業後のアンケートなどで学ぶ楽しさや達成感などを述べる生徒が多く見られた。

・日常的に職員室で情報交換をする雰囲気が生まれ、特に今年度から授業での活用が広がってきた。図書館活用教育の授業公開や校内職員研修を積極的に進めるようになって3年目だが、職員が図書館を活用した授業がイメージしやすくなった。

・教科担当者が教科間でのつながりを強く意識するようになった。教科の関連を意識した学習計画を立てたり、授業者が声かけを行ったり、また関連内容の校内展示などを行ったりすることで、生徒が学びやすい環境を生み出すことができた。

・図書館活用教育が進み生徒の来館回数が増えてくると、生徒は様々な図書や図書館の展示を目にする機会が多くなる。それも生徒の図書貸し出し数の増加につながった。

(生徒一人あたりの貸し出し数 H20年度→約1冊、H21年度→10.4冊、H22年度→26.4冊、H23年度→約29.8冊【12月現在】)

・「小学校との連携による系統的なスキル学習の育成」が課題であることを、実践を通して実感した。自分の考えを持つためには、情報を取捨選択・整理する力や的確にまとめる力・表現力などの系統的な育成が望まれる。邑南町は学校図書館支援センターは未設置だが、本校はこれらのことをねらって町小中学校や近隣高等学校にも積極的に授業公開をして、情報交換を進めている。特に同一校区内の小中学校の連携には中学校が核となることを自覚し、より具体的な取組を積み重ねていきたい。